

布施 鋼治

「すべての格闘技の選手たちがケガなく試合を終えられるように。ケガをしても、よりよい治療を受けられるように」をスローガンに、リングドクターを続ける湯沢斎さんが、9月下旬、「日常でよく見かける格闘技における外傷・障害」という講演を行った。

湯沢さんのリングドクターとしてのキャリアは12年。今もK-1やキックボクシングを中心に年間2700試合も担当。リングサイドの番人だ。

リングドクター

講演は医師が対象だったがだけに、さぞ専門用語が飛び交うお堅い話に終始すると思いきや、医師にとって格闘技は専門外。

まず「格闘技とは何か？」から始まった講演は非常に分かりやすく、興味深いものだった。

たとえば、有名なプロファイターの中に「おれは頭蓋（ずがい）骨が厚いから、なかなかKOされない」とうそづく選手がいることを引き合いに出したあと、そんなことはありえないと訴えた。

「簡単にいうと、KOは弁当箱の中で豆腐が揺れる状態。どんなに表面が厚い弁当箱でも揺らしたら同じ」

そのあと、KOで実際に起こることとして、「一瞬から数分の意識消失」「フック、カウンターの生じることが多い」などを説明した。

一口にKOといってもドクターと観客の目線は違う。倒れた選手を見て熱狂するのが観客ならば、対照的に心配するのがドクターであるからだ。

米ネバダ州の2001年から03年の間に行われたプロボクシング542試合のデータに基づく報告にも耳を疑った。「100人につき、17・1人がケガをする」

100人のボクサーがいたら、そのうち17人が何らかのケガを負うという現実。データに

研究結果を発表する予定。サミングやカットを起こしやすいグローブを使用中の団体には改善を促す。番人の闘いは続く。

（スポーツライター）

ケガ防止へ“番人”が奮闘



格闘技のよき環境へ向け、講演会を開いたリングドクターの湯沢斎さん

よって突きつけられた数字はショッキングだった。

今後、顔面プロテクターなどの防具をつけると、どれだけケガが減少するかという研

究結果を発表する予定。サミングやカットを起

こしやすいグローブを使用中の団体には改善を促す。番人の闘いは続く。

（スポーツライター）

格闘技 最前線

「すべての格闘技の選手たちがケガなく試合を終えられるように。ケガを受けても、よりよい治療を受けられるように」をスローガンに、リングドクターを続ける湯沢斎さんが、9月下旬、「日常でよく見かける格闘技における外傷・障害」という講演を行った。

湯沢さんのリングドクターとしてのキャリアは12年。今もK-1やキックボクシングを中心に年間2700試合も担当。リングサイドの番人だ。講演は医師が対象だっただけに、さぞ専門用語が飛び交うお堅い話に終始すると思いきや、医師にとって格闘技は専門外。まず「格

リングドクター湯沢さん

闘技とは何か？」から始まった講演は非常に分かりやすく、興味深いものだった。

たとえば、有名なプロフアイターの中に「おれは頭蓋骨が厚いから、なかなかKOされない」とうそづく選手がいることを引き合いに出したあと、そんなことはありえないと訴えた。

「簡単にいうと、KOは弁当箱の中で豆腐が揺れる

選手の環境改善に力

状態。どんなに表面が厚い弁当箱でも揺らしたら同じ」

そのあと、KOで実際に起こることとして、「一瞬



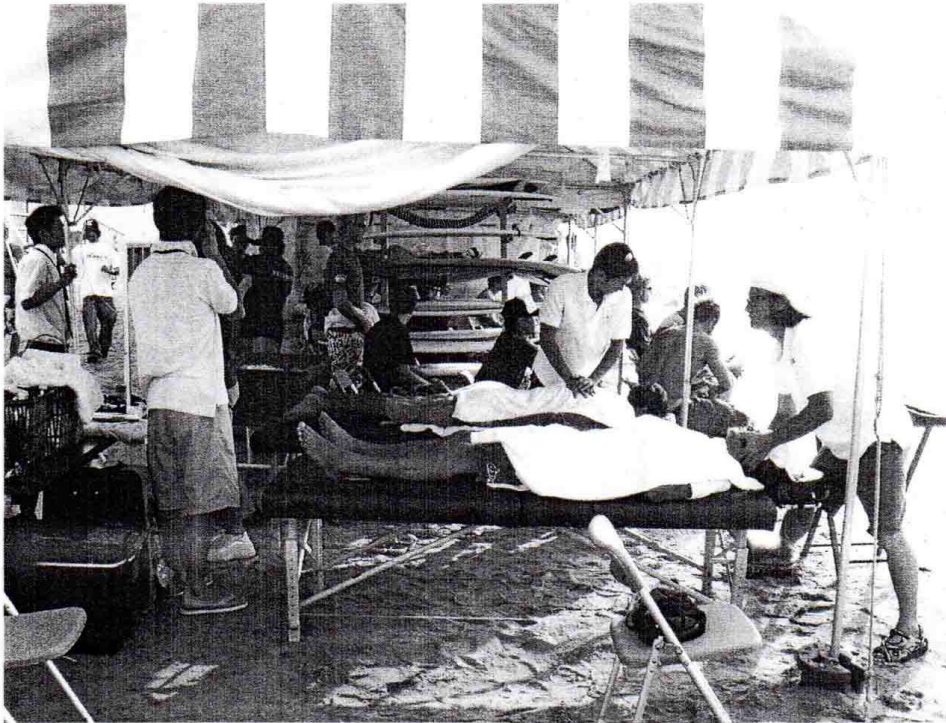
格闘技のよき環境へ向け、講演会を開いたリングドクターの湯沢斎さんだ。

米ネバダ州の2001年から03年の間に行われたプロボクシング542試合のデータに基づく報告にも耳を疑った。「100人につき、17・1人がケガをする」

100人のボクサーがいたら、そのうち17人が何らかのケガを負うという現実。データによって突きつけられた数字はショックだった。

今後、顔面プロテクターなどの防具をつけるなど、どれだけケガが減少するのかという研究結果を発表する予定。サミングやカットを起こしやすいくグロブを使用中の団体には改善を促す。番人の闘いは続く。(スポーツライター・布施鋼治)

プロ選手のコンディショニング・サポートも1年。 ASP WQS 6 STAR 田原プロ



天候にも恵まれ国内最大級の盛り上がりを見せた田原プロ。選手控えブース内に設置した2台のベッドエリアには絶えず選手が治療に訪れていた。上のスタッフ集合写真は左から鈴木一正、篠田和博、川島一則、増崎雅一、鈴木典和。



前半に参加協力してくれたメンバー。左から鈴木典和、湯澤斎、川島一則、船山直子。



昨年、久々の国内における世界大会の開催となったWQS 5スター伊良湖プロ。今年はランクをひとつ上げた6スターイベントであるとともに、大会直前の8月20日に田原町と赤羽根町が合併して新しく誕生した田原市の記念イベントとして華々しく開催された。SMAのメディカル・コンディショニング・ケア・サポートも、実は昨年の伊良湖プロより本格的にスタートしたという経緯もあり、我々にとってもある意味でメモリアル・イベント。関東より5名、地元、名古屋より2名のメンバーが愛知県田原市赤羽根西海岸に集まってくれた。

開催は8月25日から31日までの1週間。WCT選手も含めた外国人選手167名、日本人選手67名の総勢234名の選手による熱い戦いが展開された。大会3日目にはバレルもまく、肩サ

イズのグッド・コンディションに恵まれたもの、あとは膝～腰サイズとやや小さめなサイズ。しかし、選手のスピーディーかつアグレッシブな動きはスモール・コンディションをまったく感じさせないのが、世界ツアーの凄いところ。240のラウンドを予定通り消化していった。

我がSMAブースも今回は、選手控えブース内に設置。常にオープンな空間とすることで選手たちの利用しやすいムードを提供することができた。おなじみ鈴木典和トレーナー、川島一浩マッサージ師、湯澤斎医師の3名のコンディショニング・チームに加え、今回は、途中よりプロボーダーの船山直子、増崎雅一医師が参加。名古屋でトレーナーをしている篠田和博氏、現在鍼灸の学校に通いながら整形外科で働く鈴木一正氏らも参加協力してくれた。

WCT選手はフランスより直接日本にやってきた人も多く、旅の疲れをほぐすために、SMAブースに直行する選手もいるかと思えば、ヒート直前に10分間ほどのストレッチを要求する選手など、コンディショニング・ブースの活用は千差万別。先の新島クイックシルバー・プロで鈴木トレーナー、川島マッサージ師らの施術を受けた選手も多く、お互いの信頼関係も生まれてきたようだ。選手のコンディショニング・メイクの役に立てている実感が出てきたのも、スタートして1年目。回数は少ないながらもその実績と経験が生かされてきている証なのだろう。ヒートを終えた選手あるいはヒートに破れた選手は、船山の施すオイル・マッサージにうっとり。アロマ・エッセンスの香り効果とともに彼女のきめ細かな施術は、選手たちにも好評だった。